

# 3年ぶりの海の祭典、 きほく燈籠祭

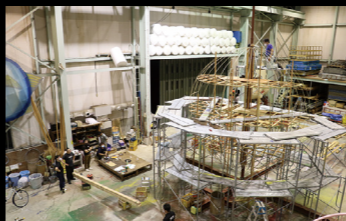
7月下旬に長島港で行われる夏の風物詩。海上を進む巨大燈籠は、「海のねぶた」とも呼ばれる。多くのボランティアスタッフが携わり、製作に約3カ月を要する燈籠と鮮やかな花火の競演は、関わる人すべての努力の賜だ。



趣向を凝らした大燈籠に合わせ、花火室のメンバーが熊野の和田煙火店と一緒に打ち上げプログラムを考案

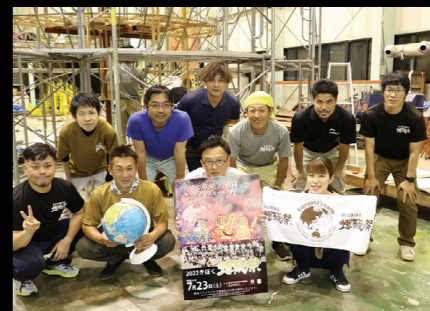
## 3カ月に及ぶ製作期間 きほく燈籠祭、再び海へ

7月23日の開催に向けて動き出した「きほく燈籠祭」。安全祈願式を終えて、燈籠づくりがはじまったのが5月11日で「これまでだと、決起大会を行っていました



今年のテーマは「みんなの地球」。角材の骨組みに竹を使って地球の丸みを出している。大きさは高さ6.8m、幅5m、電球は300個

く燈籠祭実行委員長の中村賢さん。製作作業は、月曜から土曜の19時半からで、期日が迫ってくると日曜も「マンドロ広場」にメンバーが集まってくる。



毎夜ふれあい広場マンドロに集まる燈籠製作室のみなさん。前列、地球儀を持つのが実行委員長・中村賢さん、そのとなりでポスターを手にする事務局長・久保有謙さん

年は実行委員長の提案を共有し、新型コロナウイルス感染症のことなど世界で起こっているさまざまな問題に思いを巡らせ、「みんなの地球」をテーマとした。「コロナとの共存を受け入れるしかない日々の中で、

毎日のように世界で感染症のニュースを目の当たりにします。これは日本だけの問題ではなく、世界共通の課題。こんな時代だからこそ、コロナに背を向けることなく、燈籠祭を通して、それぞれの立場から『今こそ、みんなで考える』機会にしたい

と考えています」と中村実行委員長。製作には実行委員のメンバーだけではなく、老若男女、さまざまな団体含め多くの人に参加してきたが、今年の声かけはいつものようにはいかない。まずは感染症対策を講じた。

実行委員会で事務局長を務める久保有謙さんは、『三重県指針』に基づき、独自のガイドラインを加えて、備える。「感染予防対策をしっかり取り組んだ上で、今年は大燈籠、花火、ステージのみ。飲食を含む物販等の出店ブースを取りやめた。ステ

ップを踏んで、来年は元に戻したい」と久保さん。少しずつ前に進めよう」と計画する。

## 竹細工の技を取り入れた 屋形燈籠が夏の風物詩

紀北町の燈籠祭の歴史は古く、第二次世界大戦前にさかのぼる。昭和3（1928）年、漁業町として栄えた紀伊長島町（現紀北町）の赤羽川の川開きと死者の供養を兼ねて、当時の青年団が都鳥型の燈籠百羽を作成し、河口で燈籠流しの行事を行



1 よさこいやダンスチーム、KIHOKU戦隊アババインが出演。今年は飲食等の出店はないがステージイベントで盛り上げる。2 街あかり室が中心となって箱燈籠を製作し、会場設営までを進める。3 赤羽川の川開きをきっかけに始まった燈籠祭。4 骨組みの角材に溝を掘り、鉄骨に組み合わせて土台とし、竹を遣わせて形をつくる。5 6 7 揃いのTシャツで作業に当たる。協賛のお願いも自分たちで

つたのが始まりだ。漁業の町であるため、養魚用や生魚用の大竹籠など、漁具として使用される竹細工を家業とする、「籠屋さん」と呼ばれる人たちも多かったという。以後、毎年実施され、その竹細工の技術を取り入れ、大形の屋形燈籠がつけられるようになり、いつしか紀伊長島の大燈籠祭として、熊野路の夏の風物詩として広く知れ渡っていた。しかし、過疎化が進むと若者の流出や予算不足などの理由により、昭和49（1974）年を最後に中断。その後、昭和62（1987）年になって地元の商品青年部青年団、漁協をはじめとする町民有志が立ち上がり、熱い思いで、長さ35メートルを超える巨大燈籠を製作し、華麗な姿となった燈籠祭を復活させた。復活からは今年で36年目、町民や多くの人々の支えもあって祭りを続け、燈籠が大型化するにもない、舞台も赤羽川河口から長島港を中心とする前浜一帯の会場へ移され、盛大に打ち上げられる花火の下、「津軽のネプタ」に匹敵する巨大燈籠が熊野灘の海上に出現し、練る行事が展開されている。

コロナ禍により、2年前は中止、

information

きほく燈籠祭 開催

【開催日】  
2022年7月23日(土)

【開催場所】  
紀北町長島 長島港

紀北町燈籠祭実行委員会  
紀北町東長島287番地15  
ふれあい広場マンドロ内2F

☎080-8705-2612 (10:00~17:00)  
https://touroumaturi.com

※今後の感染状況等により中止もありうる。  
最新情報は、きほく燈籠祭公式ホームページにて。

昨年はい供養花火だけを行っていたので、大燈籠製作には2年のブランクがあった。製作技術やこれまで培ってきた文化について、途絶えてしまわないかと不安に思う人がいたのも事実だ。中村委員長は「3年ぶりに集まって、最初のうちは忘れてることもあったんです。でも始めだすといろいろ思い出して、みんなでワイ

準備の段階だけでなく、告知についても感染状況を見ながら検討していく必要がある。「この時季にマスクをしてというのも酷なんです、やるからには不安をなくして開催したい」と久保さん「やってよかった」といわれる祭りにしていけるよう、スタッフはもちろん、公式サイトに感染対策をしっかりと打ち出し、来場者への協力も呼びかける。

中村実行委員長は、21歳から燈籠づくりに関わってきた。「3カ月はほとんど毎晩、仕事終えて、夕飯もそこそこに燈籠づくり。そりや仲良くなりませよ。それに毎年、一人でも二人でも新しいメンバーが入ってきてくれとるんです。これで燈籠も大丈夫やなと思います」と安堵の表情。

ふるさと活性化への希望を込めた大燈籠への思いが、関わるすべての人に受け継がれている。